

## 宮崎汎会員が見た世界の旅第1部映画編第15話

### 映画「地下水道」の悲惨 ポーランド

1992年ポーランドの首都ワルシャワを訪れた。中世の面影を残す素敵な街である。旧市街の市場広場へ案内してくれたガイドが改まった口調で、いま皆さんが眺めているこの広場は、かつてナチによって完膚なきまで叩き壊され、がれきの山でした。戦後市民の手で以前の通り忠実に再建されたものと告げた。



ナチの侵攻が風雲急を告げる中、ワルシャワ大学の学生たちが中世からの街並みを忠実に作画したが、戦後市民たちが瓦礫を掘り起こし細部に至るまで克明に再構築できたのは学生たちの描いた絵のお陰だといった。

広場からほど近い教会のレンガの壁の中に鉄製の凹凸あるものが塗りこまれている。これは何だろうとカメラを向けた。ガイドは立ち止まり、これはナチが使用した怖い武器だ。爆薬を

中世を彷彿とさせるワルシャワ旧市街の広場

積んで遠隔操作で自動走行する小型の戦車みたいなもので、ポーランド映画「地下水道」にも登場しているかもしれない。これはその小型戦車のキャタピラーの破片で戦争の記憶を忘れないために壁に塗り込め保存しているのだと深いため息をつきながら説明した。

り、これはナチが使用した怖い武器だ。爆薬を



ナチの遠隔操作で自爆するゴリアテのキャタピラー

はうろ覚えながら、廃墟と化したワルシャワの街でナチに抵抗するパルチザンが汚泥に満ちた下水道に潜り、マンホールから出入りしナチを苦しめようというものであった。下水道にもぐりこんだはいいが、そこは腰ほどもある深いへドロの真っ暗なすさまじい所であった。画面からは匂いまでは伝わってくるはずがないが、下水の汚物、へドロの猛烈な臭気が伝わってきて思わず手で鼻や口を覆ってしまいたくなったことを思い出した。

パルチザンの人々は暗闇の下水道で迷い、てんでんばらばらになり出口を探し求めさまよう。笛の音色が下水道の中に響き渡ったことが印象に残っている。不潔な下水道はある人間には耐えきれずマンホールから街中に飛び出てナチに銃殺される。あるグループは闇の中で出口の明るみを見出す

ポーランド映画といわれてハッとしました。かなり以前テレビで見たあの映画だ。人の気持ちを暗く憂鬱にしたあの映画をおぼろげながら思い出した。

「地下水道」は実話に基づく戦争映画であった。

既に記憶が薄れ細部まで覚えていないが、ひどく陰気な画面で見終わった時には、暗澹たる気持ちになったものだ。映画のストーリー

も、そこは鉄格子でふさがれ出られず絶望に打ちひしがれる。といった内容ではなかったかと延々と続く陰惨な場面を思い浮かべた。この映画は1957年にポーランドで製作され、監督は有名なポーランド人のアンジェイ・ワイダであった。

市内を案内されながら小さな子供が胸から銃をぶら下げた像がレンガ塀をバックにあった。ここらはユダヤ人のゲットーで像は子供の伝令だという。こんな小さな子供まで戦争に引きずりこんだの



ゲットーの碑



子供の伝令

かと胸が痛んだ。

帰国して改めてあの暗い気持ちにさせた映画をもう一度じっくり見ようとビデオを探したが見当たらなかった。

ワルシャワのガイドが怖い武器だといったことを思い出し調べてみた。この武器はドイツでは通称“ゴリアテ”と呼んでいた。ゴリアテは有線で繋がり爆薬を積んで遠隔操作で目的に向かい自爆させる武器で恐れられた。（1992年）